2024年度
Y7/Y20
日本代表団
報告書

G7/G20 Youth Japan

Y7 Italy 2024
日本代表団
報告書

Y7 | ITALY 2024
YOUNG AMBASSADORS SOCIETY

目次

Y7 Italy 2024

サミット概要

日本代表団紹介

Y7事前活動報告
- 事前サーベイ
- 事前イベント「ユース・ダイアログ」

Y7サミット報告
- 1日目
- 2日目
- 3日目
- 4日目
- 5日目

個人所感
- 代表団長　土田
- 代表　木嶋
- 代表　宇佐美
- 代表　増田

サミット概要

正式名称 ：Y7 Italy 2024
主催：Young Ambassadors Society
期間：2024年5月20日(月)～24日(金)
開催地：ローマ（イタリア）
参加者 ：18歳から30代の学生、社会人、政府関係者等からなるG7メンバー国の代表団32名
公式HP：https://y7italy.com/
概要：今回のY7サミットでは、Environmental Sustainability and Climate Change、Inclusion and Equal Opportunities、New Skills, Entrepreneurship and the Future of Work、Innovation and Digital Transformationの４分野をテーマとして議論を行なった。また、サミット中にPeace and Security in Global Conflictに関する内容が追加された。最終的に当サミットで作成されたコミュニケはG7シェルパのエリザベッタ・ベッローニ氏に手交された。

日本代表団紹介

（左より、増田、宇佐美、土田、木嶋）

氏名	役職	所属 （2024年5月時点）
土田智央	代表団長 – Economic Transformation	イェール・スクール・オブ・マネジメント
木嶋雛子	代表 – Inclusion & Equal Opportunities	ロンドン・ビジネス・スクール
宇佐美皓子	代表 – New Skills, Entrepreneurshi & Future of Work	外資系コンサルティングファーム
増田大祐	代表 – Innovation and Digital Transformation	スタンフォード大学

事前サーベイ

Y7 サミットへ向けた若者の意識調査

実施期間：2024年4月11日～4月30日

形　式　：オンラインアンケート

回答者　：76名

幅広い若者の意見を把握し、2024年度Y7サミット日本代表団の政策提言に反映することを目的として実施した。Y7サミットの議題である４つのテーマ「環境サステナビリティと気候変動」「インクルージョン（包摂的な社会の実現）」「イノベーションとDX」「未来の働き方」に関連した設問について回答頂いた。

事前サーベイ

結果概要（Environmental Sustainability and Climate Change）

- 回答者の68%がサステナビリティ、気候変動、エネルギー等に関する学校教育は不十分であったと回答し、19%はそのような教育の機会がなかったと回答したことから、学校教育に改善の余地があることが示された。
- 回答者の28%が教育機関におけるサステナビリティ関連の企業との連携の機会が不十分であったと回答し、65%は回答者がそのような機会がなかったと回答したことから、実業界との連携は大きな課題であることが示された。
- エネルギー安全保障の強化のためには、回答者の30%が分散化、29%がサプライチェーンの多様化、25%が効率化が重要であると指摘した。
- 分散型エネルギー社会の拡大のためには、回答者の36%がコスト、30%が推進主体、20%が需要者の利点不足が課題であると指摘した。
- サステナビリティと気候変動に貢献する新技術を開発するためには、回答者の37%が資金、32%が人材、25%がネットワーク・ベストプラクティスの共有が必要との認識を示した。
- 今後の技術開発に貢献する最も重要な主体として、回答者の30%が中小・ベンチャー企業、20%が大企業、20%が国際機関、19%が政府と考えており、ユースの中小・ベンチャー企業への期待が大きいことが示された。

結果概要（Inclusion and Equal Opportunities）

- 若者（ユース）が思い描く「インクルーシブ（包摂的）な社会」についてのイメージ像について回答を求めたところ、様々なイメージ像が寄せられたが、共通しているのは、バックグラウンドやアイデンティティに関わらず、誰もが貢献し活躍できる社会、という認識。
- 回答者の約80%が、職場・学校・その他コミュニティにおいて、自分自身も含め、理不尽な理由で不利な立場に置かれている人がいると回答。中でも、ジェンダー、年齢、障害がその要因として多く挙げられた。
- 日本において、インクルージョンがより推進されるべき分野としては、政治分野を挙げる声が多数みられた。日本政府への要望としては、インクルージョン政策の予算拡充、インクルージョン先進国との協調・協働、意思決定プロセスへの若者の参画等が挙げられた。

事前サーベイ

結果概要（New Skills, Entrepreneurship and the Future of Work）

- 若者の働き方・労働において重視する価値観等に関して調査を実施した。
- 若者が1つの会社/組織に縛られない形での労働形態を重視していることが調査結果からの主な示唆として挙げられる。
- 約80%近い回答者が、1つの会社/組織でずっと働く可能性について否定的な回答をしているほか、副業を実施していた/している/検討している回答者が半数以上にのぼった。
- 労働において重視する価値観について、会社/組織への所属意識が重要だとする回答者割合は約60%と半数以上ではある一方、お金・才能/能力の発揮・生きがいでは、いずれも90%をこえている。
- 上記を踏まえると、若者にとって特定の会社/組織との繋がりは、労働形態を決める上で、比較的優先順位の低い判断軸である可能性がうかがえる。

結果概要（Innovation and Digital Transformation）

- 日本のDX化やイノベーションが停滞していることを認識している若者は多く、特に公共サービスと教育分野での課題認識が顕著。
- イノベーションの活性化において、大学・研究機関の果たすべき役割は、スタートアップや大企業と同等、もしくはそれ以上だという声が多かった。
- G7各国間や国際的な協力という観点では、デジタル教育や人材の国際交流の支援が重要との意見が目立った。
- この数年の進歩が著しいAIに関しては、技術を評価しつつも、安全性、信頼性、倫理性などにおいて高い問題意識が示された。
- DX化が他国に比べ遅れていることについては、年功序列社会、幼少期からデジタル技術に触れている人の少なさ、変化を躊躇する保守的な企業文化など、日本特有の状況を理由に上げる声が多かった。

事前イベント

多様化・複雑化したあらゆる社会課題解決のために、「新たな選択肢」を開拓・提供してきた30代以下のリーダー３名、高島崚輔氏（芦屋市長）、安田クリスチーナ氏（ドイツ政府）、牧浦土雅氏（Degas株式会社CEO）をお招きし、今年のY7サミットの４つのアジェンダ、「環境と気候変動」「働き方の未 来」「インクルージョン（社 会 包 摂）」「イノベーションとDX」について、これまでのご自身の取り組みを中心に、社会課題解決に向けた新たな視点・アプローチ、政府とのかかわりについてお話しいただいた。

特に、社会課題解決の新たな担い手としての、民間事業者（営利企業、NPO法人、NGO等）や地方行政といった分野におけるゲストのご活躍をユース向けに紹介することで、社会課題解決のアプローチの多様性を示すことができた。ユースの参加者の皆様にも、社会課題に対して興味を持ち、積極的に関わりたいと感じたり、現時点の自分にもできることは多いと実感していただくことで、自己効力感の向上につながる機会となったと考えている。

Y7サミット報告 (1日目)

Y７イタリア2024サミットの開会式は、イタリア外務・国際協力省内の国際会議室で開催された。アントニオ・タヤーニ外務・国際協力大臣とアンドレア・アボディ青年・スポーツ大臣にもご同席いただく中、今回のY7イタリア2024の議長を務めるYoung Ambassadors Society (YAS)代表のアルバータ・ペリノ氏がサミットの開会を宣言し、今年のY7の優先分野を強調した。続いて、アントニオ・タヤーニ外務・国際協力大臣が開会の挨拶で、より良い未来を築くために青年の果たす重要な役割を際立たせた。また、青年・スポーツ大臣であるアンドレア・アボディ氏からは、グローバルな課題に取り組む上での青年の重要な影響についてお話があった。Y7各国代表団からは、過去数ヶ月に渡って議論・交渉してきた4つのトラックにおいて、それぞれの代表団が重視するポイントを発表した。この開会式は、協力、イノベーション、そしてグローバルな発展における青年の中心的な役割を強調し、サミットのポジティブで積極的なトーンを設定する良い機会となった。

Y7サミット報告 (2日目)

Y7サミット2日目は、FAO本部において、Inclusion and Equal Opportunitiesをテーマにしたパネルディスカッションから始まった。このパネルには、FAO・イタリア外務省・欧州宇宙機関・Women7等のゲストが参加し、各組織における平等・多様性推進に向けた取り組みや、今後若者が意識すべき考え方等が共有された。その後、EYのローマオフィスに移動し、初めての対面での交渉セッションを行った。これまで数か月間に渡り、度々オンラインで2国間・多国間での議論を行ってきたが、対面ならではの独特な緊張感や、各代表が意見を尊重し合う空気感をより一層感じることができた。一方で、2~3か国の代表が連携し、既に合意された点を再度交渉のテーブルに持ち込む等、複雑な利害関係が絡み合う国際社会における合意形成の難しさを体感した。初めての交渉を終えた代表団は、EYオフィスのルーフトップに移動し、ローマの絶景に迎え入れられ夕食を取った。まだ2日目ながら、国・交渉トラックの垣根を越え、互いの興味関心・将来の夢などを語り合い、代表同士の仲がより深まっていく夜となった。

Y7サミット報告 (3日目)

Y7サミット3日目は、FAO本部における二回目の交渉セッションから始まった。前日の交渉セッションから引き続き、各国の代表団が政策案をブラッシュアップするために深い議論を交わした。その後、マルチステークホルダー協議として各スポンサー等のゲストの紹介が行われ、各ゲストが交渉セッションをオブザーバーとして見学しながら交渉セッションが継続され、最後にはゲストからのフィードバックが行われた。これは、政策提案をより豊かなものにするための洞察を得る貴重な機会となった。FAOテラスでの昼食は、美しい眺めの中で、ひとときの休息と内省の場となり、代表団はリラックスした雰囲気の中で繋がりを育んだ。午後には、Environmental Sustainability and Climate Changeをテーマにしたパネルが行われた。このセッションには、G7のイタリア気候交渉リーダーや、EY、バイエル等のゲストが参加した。パネリストたちは、持続可能なイニシアチブを推進する上での若者の役割を強調した。一日が終わりに近づくと、代表団は文化セッションのためスクデリ・デル・キリナーレに移動した。この美術館訪問は、良い気分転換になり、代表団はローマの豊かな文化遺産に浸ることができた。夜はペトラ・ローマでのディナーとパーティーで締めくくられ、その日の成果を祝った。

Y7サミット報告 (4日目)

Y7サミット4日目は、午前中にFAO本部において最後の交渉セッションが行われた。トラックごとに進捗は異なり、言葉の最終確認のみ残っているトラックもあれば、白熱した議論から始まるトラックもあった。特に、サミットの途中で加えられた「Peace and Security in Global Conflict」に関する団長間による議論は逼迫したようで、どの団長からも疲れが伺えた。午後は、「Innovation, AI, entrepreneurship, new skills and future of work」というタイトルでパネルディスカッションが行われ、EYのマネージングパートナーなど業界のプロフェッショナルから、OECDやUNHCRといった国際機関の政策エキスパート、そして元イタリア政府インフラ大臣まで、様々なセクターから専門家が集まった。これらのパネリストから、New Skills, Entrepreneurship and the Future of Workトラックと、Innovation and Digital Transformationトラックの政策提言へのフィードバックを頂き、交渉の最後の詰めに大いに役立った。また、今後は私たち若者世代が主役となり、既存のシステムに縛られず変化を起こしていって欲しいというエールも頂いた。夜には、ホテルLa Griffe Romaの最上階で、お別れディナーが開かれ、これまで数ヶ月間一緒に議論を進めた仲間達と振り返りをしたり、今後の計画を共有し合い、これからも交流を続けていくことを確かめ合った。

Y7サミット報告 (5日目)

Y7サミットの最終日には、ローマ市のパラッツォ・ヴァレンティーニでクロージング・セレモニーが行われた。セレモニーは、期待に満ちた雰囲気で始まり、サミットの努力と議論の集大成となった。イタリア政府の気候変動担当特使、UNDP、ローマ市の自治体議長などのゲストにコミュニケの要旨を発表した。最後に、各国の代表団長がコミュニケにサインをし、正式にコミュニケが発行された。コミュニケはイタリアのG7シェルパに手交された。

個人所感

代表団長　土田 智央

Environmental Sustainability and Climate Change

Environmental Sustainability and Climate Changeトラックでは、事前交渉セッションにおいて各代表団が政策アイデアを提示し、それをベースに議論がスタートした。数回の事前交渉を経て、最終的なサブテーマとして、以下の3つが策定された。

1. Immediate Economic Action and Redirection of Financial Flows for a Greener Society
2. Safeguard the Environment and Biodiversity and Build Sustainable Value Chains
3. Accelerate the Transition to Net-Zero Emissions

コミュニケでは、気候変動、生物多様性の損失、汚染という三つの世界的危機に取り組むことの緊急性を改めて強調した。政策提言にあたっては、ユースとして政府の立場に囚われない野心的なアイデアを提示し、かつ実現性を考慮した、バランスのとれたコミュニケを作成するように心掛けた。日本代表として注目したトピックは、サステナビリティとグリーンジョブ教育の標準化、低炭素エネルギー技術を中心としたG7技術調整スキーム、地域コミュニティと産業の分散型エネルギーとスマートグリッド促進の3つであり、すべて最終コミュニケに反映させることができた。

特に議論が白熱したのは、エネルギー関連であった。即時の石炭廃止や電力部門のカーボンニュートラル等を主張する各国代表団に対し、北米や欧州諸国とは異なる日本の置かれた状況について、データを用いて説明することを心掛けた。日本の再生可能エネルギーの導入キャパシティ、森林面積、電力網接続、独自の技術開発等の具体的なデータを提示することで、他国の代表団からも日本の状況について今回の機会に初めて理解することが出来たとの感謝の声を得た。

個人的にも、Y7サミットは深い学びの場となり、世界中から集まった若いリーダーたちと関わることで、環境と将来の世代に対する私たちの連帯責任を改めて強く認識した。今回の経験を活かし、今後もユースの意見に基づいた変化を推進していきたい。今回のオーガナイザーであるYAS、G7/G20 Youth Japanの事務局メンバー、そしてスポンサーの皆様に感謝したい。

個人所感
代表　木嶋
Inclusion and Equal Opportunities

当トラック「包摂的な社会と機会の平等」では、社会を構成するひとりひとりが尊重される社会、アイデンティティや経済的・社会的立場に左右されずに活躍できる社会の実現に向けて、単に障壁や不均衡を正すだけでなく、より能動的かつ積極的な政策運営の必要性を訴え、以下の４テーマを中心とした具体的な政策案を提言した。

1. Building resilient societies
2. Strengthening the inclusiveness of policy-making and governance
3. Improving access to essential goods and services are critical to address systemic barriers.
4. Promoting inclusivity and accountability in all phases of the labour market through an intersectional approach

”We are stronger together than divided. Challenging as it is, we stand united not because it is easy but because it is right. We expect you to do the same.”
「私たちは分断ではなく団結によって強くなる。たとえ困難でも、私たちは団結することを選ぶ。簡単だからではなく、それが正しい選択だから。そして私たちはあなたにも同じ選択を期待する」ー　これは今年のY7コミュニケ序文の最後の一文、そして私が一番好きな一文である。
今回のY7サミットでの議論・交渉を通じて、私が得られた最大の収穫は、国際協調に対する希望である。当トラックで扱うテーマ・トピックは、どれもセンシティブなものばかりだ。各国代表がrepresentするユース、そして代表たち自身も、とても強く真摯な思いを抱えて交渉の場に臨んでいる。そうした中で、各国代表ひとりひとりが自国のユースの声がコミュニケに反映されるよう積極的に主張しながらも、他国の事情にも配慮し、可能な限り国際社会全体にとってポジティブな内容になるよう、忍耐強く交渉し、落としどころを見つける努力を厭わなかった。全員が、このコミュニケを如何に良いものにするか、にフォーカスし、そのために協力し合う姿を目にして、どんなにバックグラウンドや意見が違っても、理解し合い、協力し合うことは可能なのだと、自信を持てたのと同時に、未来への希望をもらえた。これは何物にも代えがたい、一生の宝である。

個人所感

代表　宇佐美

New Skills, Entrepreneurship and the Future of Work

このトラックでは、生成AIの台頭や、長寿命化、そして仕事・働き方に対する価値観の変化といったトレンドを踏まえ、私たちユースが、誰も取り残されず、安心して働いていくために必要な政策について議論した。コミュニケでは、以下の3つについて政策提言をまとめた。

1. Preparing for smooth transitions into the future of work
2. Securing healthy and inclusive workplaces
3. Lowering barriers to youth entrepreneurship

トラック名からもわかる通り、関連する政策分野が実に多岐に渡ることが交渉の難しさ、そして面白さに繋がっていた。初期のオンライン交渉では、各代表が全く異なる分野の政策案を持っており、政策の中身について議論するには至らなかった。そのため、交渉の多くは共通の関心事項のすり合わせに費やされた。結果、「機会」・「自由」・「安心」の3つの概念が各国共通して重視するポイントとして整理・合意され、そこに紐づける形で各代表の政策案を議論していった。最終的に、「機会」では、スキル学習・有給インターン等、「自由」では、労働時間・場所の選択等、「安心」では、起業に挑戦しやすい環境、多様な労働形態に対応した社会保障、採用・評価等におけるAIの透明性の担保の推進等、に繋がる政策が合意・採択された。(コミュニケでは、3つの概念ごとではなく政策の分野ごとに取りまとめられた。)

実に多様な意見がある中で、「働く」というテーマにおいて、今若者にとって優先順位の高いことを整理・合意し、G7首脳に届けたことは大きな成果だった。また、長時間労働・"Karoshi"・G7最下位のジェンダーギャップ指数といった日本の労働環境の実態に対して、ある国の代表が「権利のはく奪」という表現を使っていたことが、個人的には非常に印象的だった。

今回のY7サミットでは、私たちにとって生きやすい社会は、"年上の偉い人たち"が作ってくれるものではなく、今、私たちが声を上げて作り上げていくものだということを強く実感した。貴重な繋がり・学びの機会を下さったG7/G20 Youth Japan、YAS、日本・各国の代表団、そしてスポンサーの皆様に心より感謝したい。

個人所感

代表　増田 大祐

Innovation and Digital Transformation

今年は、生成AIの登場、浸透により、デジタル技術の世界は大きな転換点を迎えている。目を見張るような発展を遂げる一方、生成AIはディープフェイクや著作権侵害など、リスクが数多くあることが浮き彫りになった。このような状況を踏まえて、Innovation and Digital Transformationトラックの代表団は、イノベーションを引き続き推進しながらも、新技術のリスクを最小限に留める方法を模索した。そして、最終的に、以下の３つの内容にフォーカスした政策提言をまとめた。

1. Safeguard Democracy, Accountability, and Inclusion in Innovation
2. Protect the Digital User
3. Enable International Collaboration and Sustainable Innovation

今年、2024年は、70ヶ国で国政選挙が行われる選挙イヤーであることから、デジタル技術やAIによる選挙工作を防ぐ施策にフォーカスが当てられた。特に、G7が民主主義国家のリーダーであることから、デジタル技術が民主主義の根幹を揺るがすことのないようにするという共通認識の元、建設的な議論を進めることができた。また、イノベーションの活性化や技術の発展という観点からは、私が提言していた国際的なイノベーションハブの設立、そしてサイバーセキュリティの取り組みの情報共有推進を提言に盛り込むことができた。国内で高度技術人材が不足する中、G7各国の技術者と協業する機会を設ける重要性は増している。特にサイバーセキュリティの領域は、歴史的に日本が遅れている分野でもあり、国家間で意見交換がしにくい機密性の高いフィールドであるため、各国のベストプラクティスを共有する場の設立を提言に入れることができたのは大きな成果であった。

今回のY7サミットは、私にとってG7各国がどのようなことを重要視しているのか直感的に理解する貴重な機会となった。実際に対面で議論することで、ニュースからだけでは分かりにくい、その国の主張の背景や、文化的な違いなど、より深いニュアンスまで理解することができた。特に、私のこれまでの経験が日本と北米が中心だった為、ヨーロッパの代表団からは新しい視点を多く吸収することができた。この経験を将来の国際舞台において大いに生かしたいと思う。G7/G20 Youth Japanの皆様、そして日本代表団の皆様に、このような機会と素晴らしい時間をくださったことを心より感謝申し上げる。

Y20 Brasil 2024
日本代表団
報告書

YOUTH 2024 BRASIL

目次

Y20 Brasil 2024

サミット概要

日本代表団紹介

Y20事前活動報告
- 事前サーベイ
- 事前イベント

Y20サミット報告
- 1日目
- 2日目
- 3日目
- 4日目
- 5日目
- 6日目

個人所感
- 代表団長　田村
- 代表　永野
- 代表　嶋田
- 代表　楊
- 代表　橋本

サミット概要

正式名称 ：Y20 Brasil 2024
期間：2024年8月10日(土)〜17日(土)
開催地：ブラジル（リオ・デ・ジャネイロ）
参加者 ：18歳から30代の学生、社会人、政府関係者等からなるG20メンバー国とそのたオブザーバー国等を含む代表団145名
公式HP：https://y20brasil.org/en/
概要：今回のY20サミットでは、Fight Hunger, Poverty and Inequality、Climate Change, Energy Transition and Sustainable Development、Global Governance Governance Reform、Inclusion and Diversity、Innovation and the Future of Workの５分野をテーマとして議論を行なった。

日本代表団紹介

Y20日本代表団写真：右より、田村、橋本、永野、楊、嶋田

氏名	役職	所属 （2024年9月時点）
田村洸樹	代表団長 – Innovation and Future of the World of Work	シンクタンク
永野真理子	代表 – Inclusion & Diversity	住友商事
嶋田幹大	代表 – Climate Change, Energy Transition, and Sustainable Development	外資系コンサルティングファーム
楊悠琦	代表 – Fighting Hunger, Poverty, and Inequality	Microsoft US
橋本龍之介	代表 – Reform of the Global Goverance System	ニューヨーク大学アブダビ校

事前サーベイ

Y20 サミットへ向けた若者の意識調査

実施期間：2024年7月～8月

形　式　：オンラインアンケート

回答者　：30名

若者の意見をより明確に把握し、Y20サミットで政策提言に日本のユースの意見を届けることを目的として実地した。Y20サミットの5つのトラックについてサーベイをとり、回答をいただいた。

事前サーベイ

結果概要（Fighting Hunger, Poverty, and Inequality）

- 飢餓・貧困・不平等（以下HPI）に関するユースの認識について質問した。
- まず、HPIのどの分野が最も身近に感じるかという質問に対し、76.7%が「不平等」、残りの23.3%が「貧困」と回答した。その回答に至った理由（複数選択可）を聞いたところ、「興味があるから」(76.7%)、「自分が直面したから」(30%)、「知り合いが直面しているから」(26.7%)、「いま取り組んでいる問題だから」(23.3%)といった結果となった。
- また、HPIの原因（3つまで回答可）は「教育制度の不備」(63.3%)や「貧困の連鎖」(60%)にあると多くが答えた一方、「紛争/戦争」(46.7%)や「失業/低賃金」(43.3%)との意見もあり、包括的な施策づくりが必要だと学んだ。
- そもそもなぜ飢餓・貧困・不平等の問題を解決するのが重要か（3つまで回答可）聞いたところ、「社会の安定のため」（63.3%）、「平等な機会提供のため」（60%）、「尊厳ある生活を送るため」（56.7%）が多く選ばれた。
- 最後に、飢餓・貧困・不平等の解決のために最も効果的だと思う支援方法（3つまで回答可）において、「雇用機会の拡大」（73.3%）が群を抜いた。総じて、教育や雇用機会の拡大が直接若者にも響くものだと痛感した。

結果概要（Inclusion and Diversity）

- 学生（14名）と社会人（16名）を対象にサーベイを実施し、各群のジェンダーに関する認識と教育・職場環境における平等に関する意見を収集した。
- 学生回答者の約70%が教育の場においてジェンダーによる差異を経験したと回答した。平等な教育機会の普及に向けて、60%が「公的財政教育支出の増加」を支持し、残りの約30%が「教育の多様化・インクルーシブ教育」を支持する意見を示した。
- 社会人回答者に関しては、過半数（約50%）は職場における男女の取り扱いが平等であると認識している。また、企業内のDE&I推進の取り組みに関して、90%以上が「働き方の見直しなど、社員にとってのメリットが大きい」と評価し、「マイノリティ全般に配慮した取り組みがなされている」とポジティブな意見を示した。
- DE&Iという用語が取り扱うトピックに関して、社会人回答者の50%がジェンダーに焦点を当て、学生回答者の約40%がLGBTQ＋を選択した。世代別に社会課題として認識されるトピックに差異があることが見られた。

事前サーベイ

結果概要（Climate Change, Energy Transition, and Sustainable Development）

- 日本の若者の気候変動全般に関する認識及びエネルギー転換・需要側対策に関する意見調査を目的としてアンケートを実施し、30名(主に10-30代)から回答をいただいた。主な結果は以下の通り。
- 日本の若者にとって関連性の高い（重要であり緊急性の高い）と思う気候変動対策は何だと思いますか？
  - 脱炭素・低炭素・分散型エネルギーへの転換 (36.7%)
  - グリーンスキル教育・グリーンジョブの促進、サーキュラーエコノミーへの転換、災害へのレジリエンス (いずれも13.3%)
- 低炭素エネルギーへの転換や火力発電の高効率化の同時並行等を含む、実現可能性を鑑みた “Just and orderly transition (公正で秩序立った転換)” についてどう考えますか？
  - 賛成 (73.3%)、わからない・どちらでもない(いずれも13.3%)
- 需要側の行動について、自分の現状に当てはまるものを選んでください。
  - 住宅等での太陽光パネルなど再エネ利用(知っていて行動しようと思っているができていない: 60%、知っていたが行動しようと思わない: 26.7%、行動している: 13.3%)

結果概要 （Global Governance Reform）

- 日本の若者のグローバルガバナンスや世界情勢に関する認識や考え方を調査することを目的としてアンケートを実地し、30名から回答をいただいた。各質問に対して1(全く理解できていない）から５（とても理解できている）を答えてもらい、各トピックの理解度を調査した。
- グローバル・サウスノースの分裂についての理解が比較的に高く、そのうち「日本はグローバルサウスの声に耳を傾ける存在を目指すべき」の発言に共感を示した方が多かった。
- 30人中25人はG4（日本、ドイツ、インド、ブラジル）の国連安全保障理事会の常任理事国入りを支援するか？とい問いに対し4もしくは５と答えた。

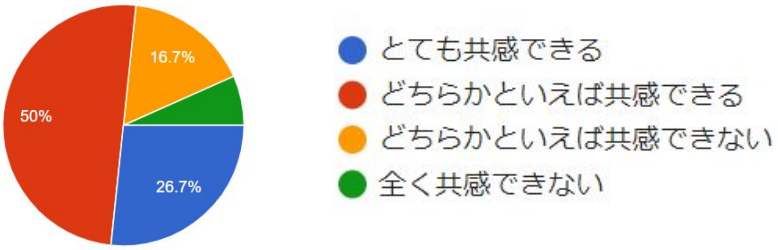
事前サーベイ

結果概要（Innovation and Future of Work）

- 10代から40代以上の幅広い層を対象にアンケートを実施。回答者数は10代が6名（20%）、20代が13名（43%）、30代が9名（30%）と大半を占めた。なお、男女の割合は男性16名、女性14名。8割を超える25名が最終学歴大学生または大学院生であった。

- Future of Workについて「あなたにとっての“やりがいのある仕事”に最も近いのはどれですか？」との問いに対する回答は以下の通りだった。およそ半数（47%）の回答者が「社会をより良い方向に変えること」と回答しており、次いで「自分の長所が生かせる活かせること」が多かった（23%）。仕事を通じて高い収入や影響力を得るよりも、自分の強みを活かして社会に貢献したいと考える日本の若者が多いことがわかった。

- Innovationについて「今の社会は、チャレンジすることで掴めるチャンスよりも、失敗して二度と現状に戻れないリスクの方が高い」という考えに共感できるかを尋ねたところ、８割弱（77%）が「共感できる」と回答した。イノベーションを起こすためにはリスクを取ってチャレンジすることが必要にもかかわらず、多くの日本の若者が「失敗するとやり直せない」社会にいると感じていることがわかった。



事前イベント

国内における機運醸成と若者の意見の集約を目的としたディスカッションイベントを実施した。駐日ブラジル大使館及びJETROサンパウロ事務所とのオンライン共催とし、学生・社会人を含む約60名が参加した。本イベントは参加者との活発的な議論を行うことに重点を置き、以下のようなタイムテーブル(計90分)で実施した。

- 基調講演 – 駐日ブラジル公使から「Y20サミットへの期待」
- Y20の紹介 – Y20日本代表団の自己紹介・各トラックのテーマを説明
- ゲスト紹介 – 各ゲストからご専門/興味分野を紹介
- ワークショップ – 5グループに分かれ、各テーマに沿って議論
- 結果の発表 – 各グループから議論内容の発表

基調講演では、G20の交渉を担当しているロナウド・アマラウ駐日ブラジル公使から激励のビデオメッセージをいただいた。ワークショップでは4名のゲスト：キャシー松井氏(MPower Partners)、幸村真希氏(UNICEF東京事務所)、中山貴弘氏(JETROサンパウロ事務所)、山﨑翔氏(OECD環境局)をお招きし、各トラックに分かれてディスカッションを行った。それぞれのテーマにおける課題・優先順位(重要度x緊急度)・解決策について議論し、ゲストからの専門的なインプットを参考にすることで、具体的かつユースの視点が反映された提言を導くことができた。

ご協力・ご参加いただいた駐日ブラジル大使館及びJETROサンパウロ事務所、ゲストの皆様にはY20日本代表団一同、心より感謝申し上げたい。

Y20サミット報告 (1日目)

サミット開会式の前日、Y20ブラジル事務局の案内のもとで他国の代表団とともにリオデジャネイロの名所を巡った。

まず、早朝5時にコルコバード丘のキリスト像に行き、現地のY20担当者より像の歴史的意義の説明を受けた。丘からはリオデジャネイロを一望でき、また他のホテルに滞在する他国の代表団と歓談する機会となり、翌日から始まるサミットのいい序章となった。

ホテルでの昼休憩を挟んだ後、午後は市街地にある Museo do Amanhã (明日の博物館) とRio Museum of Artを訪れた。世界の科学発展の歴史やブラジルのFunk Cultureについて理解を深める良い機会となった。

Y20サミット報告 (2日目)

Y20ブラジル2024サミットの開会式は、シネランディア広場に面し、国内で最も重要な劇場の一つとされるMunicipal Theaterで開催された。この日はInternational Youth Dayであり、ブラジルのYouth団体のメンバーや大学生など、多くの参加者が集まった。

開会式では、ブラジルのファンク音楽やサンバダンスのパフォーマンスが行われた後、Y20ブラジル議長のマーカス・バラオン氏やブラジル共和国大統領府のSecretriatであるマルシオ・マセド氏によるスピーチが続いた。スピーチでは、世界人口の4分の1を占めるYouth層が社会的、経済的、気候的な変化の影響を最も受けている現状に触れ、Youthが多様性と大胆さをもって解決策の声と顔となるべきである、というメッセージが強調された。

また、夜のカルチャープログラムでは、ブラジルのサンバのパフォーマンスなどが繰り広げられ、ブラジルのエネルギーと熱気が力強く感じられるオープニングとなった。

Y20サミット報告 (3日目)

サミットの2日目に初めてY20のメイン会場である"National thirst of the organization 'Ação da Cidadania'"を訪れた。会場ではトラックごとに部屋が割り当てられ、そこでミーティングを行い今後の交渉の基盤を探り始めた。それと並行して、各トラックの分野で活躍する著名人たちによるパネルディスカッションイベントも実施された。イベントに参加しながら、空いている時間を使って交渉を行うという、非常に忙しい1日だった。

夜にはリオデジャネイロの知事との立食形式のディナーが行われる予定だったが、あいにく知事が欠席となってしまった。ただ、リオの夜景を眺められる屋外の会場でサンバのパフォーマンスを見ながら、各国の代表とコミュニケーションをとり、親睦を深めることができた、貴重な時間となった。後半は小さなグループに分かれて、政策の交渉を進める姿も多く見られた。

Y20サミット報告 (4日目)

サミット開会式から3日目に正式にトラックごとの交渉が始まった。これまでの議論は事前交渉と位置づけられ、この日からホスト国であるブラジルのmethodology teamが加わり、ファシリテーションを行うようになった。これは全トラックでの交渉形式を統一したいというブラジル側の意図であったが、形式を遵守する一方で議論のペースが落ちてしまうのが課題となった。トラックとして効率的に議論を進めるために、より各国同士の協調が必要となった。

Climate Change, Energy Transition, and Sustainable Developmentトラックでは、事前に合意されていた15の重点分野に沿って具体的な提言をドラフトする作業を開始。まずは地域的なバランスを考慮した5グループに分かれ、各グループが3-4分野を担当し提言の素案を作った。この日は各分野の提言素案を確認し、最後にClimate educationの文言を全会一致で合意して最終化することができた。

交渉の進捗が芳しくなかった一部のトラックは、正式な交渉後に滞在先のホテルにて引き続き交渉を行った。

Y20サミット報告 (5日目)

交渉が山場を迎えた日となった。前日ファシリテーション面で進め方の合意がとれず、本題の議論が開始するまでに時間を要したトラックもいたが、午後からは本格的に全トラックが交渉を行う運びとなった。

全トラックにて主な議題となったのは、イスラエル・ガザ間の紛争である。「An immediate call for ceasefire between Palestine and Israel」を宣言書に入れ込むかどうかについて全トラックにて議論となり、Global　Goveranceのトラックで全般的に議論する運びとなった。同トピックについては最終合意がなかなかとれず、交渉の最終日まで意見形成が取れずであった。

また、DE&Iのトラックではlgbtq++含むジェンダーに対する用語で意見形成に時間がかかり、議論の大半を同トピックのディスカッションに費やした。西洋諸国・中東諸国の間での対立が顕著に見える議論となった。

Y20サミット報告 (6日目)

多くのトラック交渉で遅れが発生していたため、最終日は当初予定されていた朝からのHoD（各国団長）による交渉が延期された。午前中は各トラックの最終交渉が行われ、その後各提言の中でも最も注目を集める冒頭に記される「クロスカッティング提案（各トラックから上がってきた分野横断的な提言）」とテーマ選出の背景を記した前文、および様々な理由から合意に至らなかった表現などに対処するための注釈セクションをHoDで交渉を行った。

最初の大きな論点は前文であった。ブラジル事務局が示した案には、一部トラックから提案された「恒久的なY20事務局の設置」が含まれていたが、財源や運営の実効性などに加えて、一部の国は政治的背景もあって強く反対し、この提案は削除された。他にも「女性」を脆弱な人々に含めるかどうかで議論が紛糾した。これは一部の国の政治的な背景に起因するものであったが、合意が得られない以上はコミュニケに含められないため、文言の調整をし「女性や脆弱な人々」で落ち着いた。

最後まで合意に至らなかったのが、Fighting Hunger, Poverty, Inequality トラックの提言において現在進行中の紛争についてどれを例示するかという点である。当初予定していたファイナルセレモニーではコミュニケがまとまらないまま実施することとなり、慣例だったHoDによる署名プロセスが実施できない事態となった。このままでは史上初となるコミュニケなしの事態が目前に迫っていた。

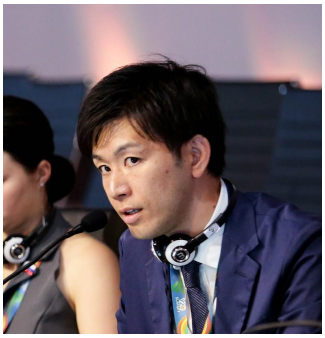
会場の撤収作業が行われる中、HoDのみの交渉は続き、最後にある国のHoDが提案した案として、明記を合意できる紛争は残したまま「列挙すべき紛争については合意に至らなかった」という注釈をつける形で合意に至った。日付が変わる30分前、ホテルに戻るためのバス車内での合意となった。その後も署名までの間に二転三転する混乱もあったが、最終的にはオンラインで署名が行われ、コミュニケの公表に至った。

ここでは語りきれないほど、すべての提言のひとつひとつの単語と注釈には、対立する立場や意見をなんとかコンセンサスに持っていくための努力とドラマが詰まっている。ぜひそのような背景を想像しながらコミュニケを味わっていただきたい。

個人所感

代表団長 田村 洸樹

Innovation & Future of Work



本年のY20日本代表団は、各メンバーの強みと個性を最大限に発揮することで、各トラックの議論を先導し、持ち寄ったアイディアが最終提言に盛り込まれるなどの顕著な成果を収めた。準備段階からサミット当日の交渉に至るまで、常に日本の若者を代表する自覚と責任のもと、より良い国際社会の構築に向けて使命を果たすことに専念した。準備期間で最大のマイルストーンとなったのは、自主企画のオンラインディスカッションイベントであった。ゲスト講師の選定から事前レクチャーまで全てを自主的に企画・運営し、最終的には想定を上回る参加者を得て、活発な意見交換の場を創出することに成功した。

ブラジルで開催されたサミットでは、初めてホストを務めたブラジルY20事務局の尽力により、文化や慣習の異なる約150名の若者が一堂に会し、議論と交流を深めた。担当した「イノベーションと未来の仕事」トラックでは、AIやブロックチェーンを含むイノベーション・先端技術の適切利用、若手起業家・社会課題解決型スタートアップ企業等の支援、ディーセントワークと健康で安全な労働環境の整備等が主要テーマとなった。具体的な提言には、若手イノベーターや研究者のための情報交換プラットフォーム「ユース・イノベーション・サミット」の開催や、若手起業家への資金調達オプション多様化のための資本市場改革などが含まれた。特筆すべきは、G20リーダーにとって具体的なアクションに移しやすい「既存G20ツールの活用」という自分の提言案が、多くの他国Y20代表者からの賛同を得て最終提言に盛り込まれたことである。

また、本年の活動の特徴として、Y20サミットに関連する活動の枠を超えた様々なステークホルダーとの意見交換にも積極的に取り組んだことである。外務省経済局の山田審議官、経団連（B20）の久保主幹との貴重な対話の機会を通じて自分たちの提言案を磨き上げた。サミット後には、こども家庭庁の加藤大臣、駐日ブラジル大使館のアマラウ公使に活動報告も実施した。ユースのネットワークにとどまらず、多様なステークホルダーとの連携を強化していくことが、国際アジェンダを国内政策への実装に不可欠であることを強く認識した。

この半年間の活動を通じて、国際的な場での議論の複雑さと合意形成の難しさを実感すると同時に、若者の声をリーダーに届けることの重要性を再認識した。驚きと発見、時には挫折感、そして最後には大きな達成感を味わった、人生で最も濃密な時間となった。Y20サミット参加を通じて得られた知見と人脈を活かし、今後も若者の声を政策に反映させる取り組みを継続していく所存である。

個人所感

代表 永野　真理子

Diversity & Inclusion

Diversity and Inclusionトラックでは、事前交渉セッションで各代表団が政策アイデアを提示し、それに基づいて議論が進行した。その結果、12のサブテーマが最終的な提案として策定された。

特に議論が白熱したのは以下の点：

Combat all forms of violence (physical, sexual-based, verbal, emotional, cyber), as defined by SDG 5, particularly for girls, women, and people in vulnerable situations* through developing programs that ensure safe virtual, public, and private spaces.

この点については、「LGBTQ++」や「Gender」という単語の使用に関して、センシティブな諸外国からの反対があり、どの単語を使用するかに関する議論が長時間にわたった。最終的には、「各国の文化や慣習によってgenderやpeople in vulnerable situationsの定義が異なる」との脚注を入れることで代表団の合意を得ることができた。西洋諸国と中東諸国の間には明確な対立構造が見られたため、日本代表としてはできるだけ中立な立場を維持し、コミュニケの最終化を共通の目標として強調した。

議論を通じて、Youth間でも価値観やスタンスの対立構造が顕著に現れた。政策提言に際しては、感情論ではなく、事前の調査や見えていたデータを基に実現性を考慮したコミュニケの作成を意識した。日本代表として注目したトピックは以下の三つであり、すべて最終コミュニケに反映させることができた：

1. サイバー上の権利保護（サイバー上の誹謗中傷からの保護）
2. デジタル領域におけるリテラシー向上（機会提供だけに留まらないことを強調）
3. 政治、経済、NGOにおける女性の活躍推進

Y20サミットは貴重な学びの機会となり、世界中から集まった若いリーダーたちとの対話を通じて、各国におけるYouthたちとの連帯責任を再認識した。この経験を基に、今後も常に日本国としてどのような変革が可能なのか、どのような価値提供が可能なのか、を意識し、若者の意見に沿った変革を進めていきたい。最後に、今回のサミットを主催したY20ブラジル事務局、G7/G20 Youth Japanの事務局メンバー、並びにスポンサーの皆様に深く感謝の意を表する。

個人所感

代表　嶋田 幹大

Climate Change, Energy Transition, and Sustainable Development

Climate Change, Energy Transition, and Sustainable Developmentトラックでは、ブラジル渡航前の事前交渉で76の初期的な提言案が検討されており、それらの分類･統合･優先順位付けを行う形で議論が進んだ。最終的に15の重点分野が合意され、最後の2日間で各提言の細かな文言修正を行った。その中で特に議論が白熱したトピックは以下の2点だった：

- Financing and Fiscal Policy：CBDR (Common But Differentiated Responsibilities)の文脈で明確にdeveloped countiesに言及するか否か、またpresent responsibilitiesという文言を盛り込むか否かについて、前者はフランスとメキシコが、後者はフランス・サウジアラビアが対立。
- Trade：CBAM(Carbon Border Adjustment Mechanism)のコンセプトを盛り込みたいUK及びフランスとNon-discriminatory trade of green techを主張する中国が対立。

また、本トラックの最大の争点となると思われたEnergy transitionの分野では、化石燃料(石炭火力)のphase out/down/transition away by whenに言及することよりも具体的なhowのアクションを提示することがユースとしての付加価値ではないかと私から提案し、方法論の議論に誘導することができた。

個人的なハイライトは、define differentiated “abated” energy sourcesという文言を最終コミュニケに採用できたことだ。2024年8月現在、G7エネルギー大臣会合などではphase out unabated fossil fuelが言及されているものの、どのエネルギー源を(どんな脱炭素化努力をすれば)abatedとするかという具体的なタクソノミーは存在しない。明記しないことで化石燃料の継続的使用への逃げ道を残しているという見方もあるが、私はこの定義づけに関して日本が主導して提言することで、我が国のエネルギー安全保障を担保した上で国際社会の公正かつ秩序立った移行を加速させることができるのではないかと考えている。この考え方について全会一致の賛同を得られたことは大きな収穫だった。

革新的なコンセプトについて公的な場で言及していくことによるデファクト化は、それを実現させる上で大きな推進力になる。この観点において、Y20という機会を通じてG20首脳陣に対しユースの提言を届けられたことを光栄に思うとともに、この提言が実行に移されることを切に願う。最後に、このような素晴らしい機会をくださったY20ブラジル事務局、G7/G20 Youth Japanの事務局メンバー、並びにスポンサーの皆様に心より感謝の気持ちを表したい。

個人所感
代表 楊 悠琦
Fighting Hunger, Poverty, and Inequality

「Fighting Hunger, Poverty, and Inequality」はG20でもブラジル主導でタスクフォースがつくられるなど、迅速な課題解決が求められる分野である。ただ、同時に関連分野が多岐にわたるため、トラックの交渉では如何に要点を抽出して意義のある政策提言ができるかが焦点となった。

各代表の提案を整理した上で、以下の5つの分野に重きをおくこととなった。

1. Food System
2. Education and Capacity Building
3. Healthcare
4. International Aid
5. Economic and Financial Measure

当トラックは未来を担う人財である若者の公平な（Equitable）成長機会を確保する方向で合意し、各々の専門知識を持ち寄りながら議論を進めた。私は教育・経済の機会均等の分野に特に力を入れ、ユースへの社会・文化・経済資本を包括的に提供することと国の枠組みを超えたナレッジ共有の仕組みづくりについての提言を行った。

交渉を通じて最も印象的だったのが、サミット参加国の多様性と協働可能性である。各国の文化背景はもちろん、経済発展レベルも異なるため、提言内容に偏りがないように当初の30以上にのぼる提言を15まで絞ったり、各国の状況に合わせた柔軟な解決策をつくることをコミュニケ内にて繰り返し強調したりした。それから、他国代表との交渉や雑談を通じて、多様性は社会背景のみならず、各国の施策にも表れていることを多々感じた。単なる経済・技術援助にとどまらず、多様な施策をお互い学びあい、協働して目下の社会課題を解決していくことが
持続可能な経済発展に繋がっていくだろう。

G20はステークホルダーが多く、公式附属会議の一つであるY20の提言が首脳陣に届き実際の施策として反映されるには、継続的な施策のモニタリングや情報発信など多方面の努力が求められる。Y20サミットは終了したものの、引き続きY7/Y20の関連活動のサポートをできる限り行っていきたいと思う。

最後に、こうした代え難い機会をくださった、Y20ブラジル事務局、G7/G20 Youth Japan事務局ならびにスポンサーの皆様に深甚なる感謝の意を表したい。

個人所感
代表 橋本龍之介
Reform of the Global Governance System

「Reform of the Global Governance System」は現在ブラジル政府が焦点を当てている「Global Governance Reform」を中心とし、様々な議論が行われた。事前セッションの時点で様々な争点が明らかになり、長い議論を交わした。事前セッションで議論した点、本会議で明らかになった新たな論点を基盤として１週間政策提案書に入れる内容を議論した。

様々なトピックが議論されたが、主に印象的だったのが（そして日本代表として取り組んだのは）以下の2点だ。

1. Considering the catastrophic impact of the use of nuclear weapons on civilian populations,affirm that nuclear energy should be used for peaceful purposes. We also call for leaders to collaborate towards the global reduction of the investment in nuclear armaments.
2. Reform the United Nations to be more inclusive, representative, transparent, accountable and ensure equitable geographical representation to reflect contemporary realities.

まず1つ目は自分が事前セッションの時点から押していた核軍縮に関しての提言だ。言葉のニュアンスについて議論が白熱し、最終日の提出締め切り直前まで交渉が続いた。だが、日本代表として核軍縮についての提言は絶対に必要だと考え、最後まで交渉を諦めず可決された直後大きな拍手をいただいた。より平和な国際社会を実現させるためには核軍縮は必要だと考えている。２つ目はインドと共にアンケートでも賛同を得ていた日本(G4)の常任理事国入りを趣旨とした提案だった。G4という言葉を残すことはできなかったが、国連改革の必要性を提言として残すことができたのは大きな獲得であった。

世界中の若者と議論することはとても有意義なことだった。Y20というプラットフォームを使い、G20首脳陣に日本、そして世界の若者の想いと意見を提言として伝えられたことをとても嬉しく思う。最後に、Y20という貴重な機会をくださったY7/Y20 Japanの事務局メンバー、ブラジル運営局、並びにスポンサーの皆様に心から感謝の意を表したい。

協賛・謝辞

協賛

一般財団法人　MRAハウス
公益財団法人　三菱UFJ財団

謝辞

顧問 安部忠宏(元日本国特命全権大使)